

結論にかえて

川口 裕司（研究代表者）
東京外国語大学外国語学部教授

最初にも述べたが、本研究の目的は以下の通りであった。

「この研究では、最新の IT 技術及び IT 環境を活かし、情報工学と各言語教育及び言語学の専門家の協力によって、IT 技術の言語教育への適用を検討するとともに、言語教育の内容そのものに関しても、計算言語学の最新の成果を応用し、再検討を行う。この研究では、どこでもいつでも音声トレーニングやビデオを利用できるようにするとともに、学習者間及び学習者と教師との間のコミュニケーションを改善し、協調的な学習をインターネット環境で実現することを目指す。」

情報技術の進歩はたいへん速くてめざましい。そのため、今、この段階で上記の目的が達成されたかどうかを問うことはもちろんしない。そもそも平成 14 年から平成 16 年の 3 年間という、かくも短い期間の中で、上記の目的が達成される可能性は低く、むしろ今後も継続して取り組むべき目標・課題と考えたい。とはいうものの、最新の IT 技術を応用し、本学の研究者たちが、それぞれの言語教育の中に新たな風を吹き込み始めたことは間違いない。筆者も含めて彼らは、長い長い長休止の後に、今、ようやく重い腰を少しだけ起こし始めた。ただし彼らの動きはゆったりとしている。もちろんそれにはそれなりの理由がある。

今や、ユビキタスな言語学習環境は、私たちの身の回りに、静かに、しかし着実に、ヒタヒタと近づきつつある。言語学習はこの環境の激変を考慮に入れられないわけにはゆかない状況に追い込まれている。こうした新たな環境の出現を前にして、素直に希望や期待を語ることもできよう。しかしながら、少なくとも筆者には、この環境の変化が 21 世紀における生存競争が、なかば強制的に私たちに課しつつある重苦しい歴史の必然のように思える。しかもそれはこちらが立ち止まって考えることさえ許されない、実に冷徹な現実なのだ。

本研究は、ユビキタス環境による言語学習の高度化を実現するための基礎研究であったわけだが、本研究が外国語大学で行われることの真の意義は、言語学習の箱ものとしての進歩ではなく、むしろ言語学習そのものの深まり、すなわちプロセスとしての言語学習の意義や言語教育の方法論的な洗練や教材のコンテンツ評価などが研究されることにある。そうした観点から眺めてみると、本プロジェクトは残念ながら、まだまだやり残したことが多いと言わなければならない。

本プロジェクトとほぼ時を同じくして産声をあげた 21 世紀 COE「言語運用を基盤とする言語情報学拠点」では、17 言語という多言語による発音教材と会話教材が開発され、現在も引き続き文法教材が製作されつつある。確かにコンピュータおよびネットワークの進歩により、教材は私たちの近くに、よりフレンドリーな顔つきで現れるようになってきた。しかし教材と学習者の関係が、今後どのように好転してゆくのか、まだまだその将来を見通すことはできないし、まったく楽観できる状況にもない。ユビキタス環境はいったいどれほど学習効果や達成度に積極的な効果を残すことができるのか。学習者は冷たい心をもった教師から、どのようにして血の通った人間の言語を学ぶことができるようになるだろうか。

最後に、これまた大げさな言い方になってしまうが、今、私たちは、本科研プロジェクトを通して、あらためて「進歩」というものの意味を問いかけられているように思えてならない。言語研究と言語学習の「進歩」とはいったい何なのであろうか。

編集後記

この論文集には、インターネット技術の活用と言語運用教育の観点から、様々な分野よりご寄稿をいただきました。このインターネットを活用した言語教育の分野は、本論文集の内容の多彩さからもわかりますように、研究分野としては非常に大きな可能性を持つものとなっております。これからのこの分野に関して、研究の大きな発展がなされることを願ってやみません。

M. T.

インターネット技術を活用したマルチリンガル
言語運用教育システムと教育手法の研究
基盤研究 (B) (2) 課題番号 14310218
2005 年 3 月 31 日発行

編者 川口 裕司 (研究代表者)
編集協力 武次 三愛 (博士前期課程)
TEL 042-330-5235
〒183-8534 東京都府中市朝日町 3-11-1
東京外国語大学外国語学部

印刷 三鈴印刷株式会社
TEL 03-5276-0081
〒101-0051 東京都千代田区神田神保町 2-32-1